

室生犀星「蝶紋白」論

——虚構の〈復活〉前夜——

一 〈履歴〉から消去された『黒髪』の書

昭和三〇年二月、室生犀星の短編小説集『黒髪』が新潮社より出版された。『黒髪』は、犀星にとって、短編小説集『氷つた女』（クラルテ社、昭和二三・一〇）、随筆集（付、俳句・詩・小説）『泥孔雀』（沙羅書房、昭和二四・八）以来の新作単行本であり、奥野健男「犀星評の変遷（九）」²によれば、「七年間一冊の新刊本も刊行されない不遇時代が続き、犀星は戦後の人々から、完全に忘れ去られ、過去の作家になつてしまつた」という頃、そして、「この『黒髪』は売れなかつたが、その年の十月に刊行された『随筆女ひと』は、たちまち六万部というベストセラーになつた」、「犀星は奇跡のごとくよみがえり、人々は驚嘆し再び、みたび空前の犀星ブームが捲き起つた」という、『随筆女ひと』（新潮社、昭和三〇・一〇）による〈復活〉の前夜に出された一冊ということになる。

奥野は「その頃の犀星のうつつたる心情と生活」に詳しいも

米山大樹

のとして「夕映えの男」（初出「ゆふばえの男」、「婦人公論」昭和三二・一、所収『夕映えの男』講談社、昭和三二・六）を挙げている。

「夕映えの男」は、「美しい装幀の書物から、作者自ら遠退かるといふことは、その作家の荒廃ただならざるものがあつた」と書き出され、「五六年の間かういふさびしい日を送り、知己からおくられる立派な作品集に返すための自著もなかつた」「私」が、「まるで詩集のやうな装ひの本」、「その本の内容はわかい女の人にむかふ、私の美学の観念をひそめたもの」を出版するまでが書かれた小説である。この「詩集のやうな装ひの本」については、森晴雄論³がすでに、室生犀星の作家生活における事実と照合し、『黒髪』ではなく、「本の売れない男を際立たせるには」「よりふさわしい」ものである『随筆女ひと』を彷彿とさせる記述になつてゐることを指摘している。

だが、「沈滞期」以降最初の単行本であるはずの『黒髪』が何故「夕映えの男」に書かれなかつたのかを問ひ直すとき、犀星の昭和三〇年三月四日の「日記」⁴から、極めて単純な回答を用

意することもできる。

「黒髪の手」古山高麗雄、川路柳虹、堀たえ子、の三氏におくる、こんどは寄贈分二十冊分を貰ふことにした。自分の書物を貰ふことはばかばかしいが、それとは別な意味で何年ぶりの本であるから、つい義理のある人におくるやうになるのである。

装幀で失敗したので包ミ表紙をとつて、おくることにした。中の布表紙は自分がこさへた装幀だからである。

犀星は、待ちわびた近作集の完成に際して、「装幀で失敗した」と、包み表紙を外して知人に謹呈本を送っていた。つまり、犀星にとつて、『黒髪の手』は「美しい装幀の書物」となり得なかつたのである。本扉に「鍋井克之装幀」と書かれているその装幀について、編集を担当した谷田昌平は「カバー（包ミ表紙）は表から裏にかけて画伯の花の画が刷られているが、最初「字と紙だけ」の装幀を考えていた先生は、華やかなこの洋画の感じが好みに合わなかつた」とした上で、次のように述懐している。⁵⁵

『黒髪の手』は私が編集者になつて最初に手がけた単行本である。装幀や目次についての犀星の希望は、時代の感覚に合わない点が多くて、社の編集会議で受入れられなかつた。未だ編集者として素人に近かつた私は、犀星先生に対する申訳などと共に、犀星のような独自の美意識をもつた文壇の大家の好みにそいながら本をつくることの難しさを感じた。

とはいえ、森論が「作者犀星と直接結びつける必要はない」と断っているように、小説として発表された「夕映えの男」における取捨選択はその小説の構造のなかで問われるべきであろう。では、「私の履歴書」の連載第二四回（「日本経済新聞」昭和三六・一二・六）で、再度、この虚構が繰り返されることはどうか。室生犀星が自身の〈復活〉をどのように相応しい神話として提示したか、改めてその〈履歴〉から『黒髪の手』を消去した意味は、何であろうか。

「私の履歴書」では、戦後に体験したという「三度目の沈滞期」について、次のように書かれている。

作家にとつて一等さびしいことは一冊の書物も出ないという時期は、何と言つてもたすからなことなのだ。

昭和二十九年小説「ボストンバッグ」を書き前の年の「生涯の垣根」とともにいささか見直され立ち直つたが、随筆「女ひと」「続女ひと」を書いて久しぶりで、書物としてこれを机上に眺めることが出来たが、どちらかといえば小型の地味な書物であつたが、珍しく重版の時を得て出版書店からの検印紙の到着するのが、毎土曜日ごとになり速達便の呼び声を私は聞耳立てて聴いた。

ここでは、より確かに、『黒髪の手』が黙殺されている。このあとの文章では、「小説「舌を噛み切つた女」を書き、「妙齡失はず」を書き、長編「三人の女」を書き」と、「私」が「三度目の沈滞期」から「立ち直つていく様子が語られ、また、翌第二五

回〔日本経済新聞〕昭和三六・一二・七）では、

昭和三十年から三十六年初頭にかけ、私は物の怪に憑かれたように書いて、毎日たくさんの活字を吐き尽した。「杏つ子」の後に長編「我が愛する詩人の伝記」を書き、長編「かげろうふの日記遺文」を書き、「蜜のあはれ」を書き、「硝子の女」を書き、「生きたきものを」を書き、「女流作家評伝」を書いた。

と語られている。つまり、「私の履歴書」における晩年の〈復活〉は、作品を書くこと、それも「物の怪に憑かれたよう」に書くことによつて為し遂げられていくのである。さらに、この「私の履歴書」自体についても、「虎の門病院で肺炎の治療をうけながら、毎日七度二、三分の発熱の間に執筆された」と同作中で言及し、「書く」という気になった時の私には、ふだんの健康がそろそろ戻つて来ていることに気づくのだ」と、書くことによる回復への期待が示されている。

さて、本稿は、その〈履歴〉から削除された『黒髪の書』の巻末に収められた短編小説「蝶紋白」（初出「文藝」昭和二九・六）の分析を行うものである。「蝶紋白」は、昭和二九年一月から二月にかけて日比谷胃腸病院に入院していた犀星の経験を書いたものとされ、先行する「黄と灰色の間答」（「群像」、昭和二九・四）、「文章病院」（「小説公園」昭和二九・五）との三部作として言及されることが多かった。だが、「彼は文章と一しよに入院したといつてよい」と語られる「蝶紋白」での病院生活には、前二篇や

室生犀星の「日記」との相違点から、特異な虚構性が指摘できる。現実の成功の陰に隠れ、作家の神話化した〈履歴〉に残されなかった、このもう一つの〈復活〉前夜を検討することで、晩年の室生犀星の営為を捉えなおす契機としたい。

二 「蝶紋白」の虚構性

「蝶紋白」について、『黒髪の書』巻頭の「序と解説」には、「蝶紋白」は「黄と灰色の世界」「文章病院」の三篇からなり立つ、病棟の中の一つの世界であるが、この二篇を割愛して「蝶紋白」だけをここにをさめて見た」と書かれている。昭和二九年に「彼」の罹病生活を描いた連作三篇のうち、最後に発表された「蝶紋白」のみが『黒髪の書』に収められ、先行して発表されていた「黄と灰色の間答」と「文章病院」の二篇は、のちに随筆集『誰が屋根の下』（村山書店、昭和三一・一〇）に収録されたのである。また『誰が屋根の下』の「あとがき」には、次のようにある。

「黄と灰色の間答」「文章病院」は小説として発表したものであつたが、何処まで小説であるか、また随筆の形式をとつてゐるものだけか、判断しにくい、敢てここにをさめることにした。生活にからみ合つたものは見のがすことが出来ない、これらは悉く病院で執筆したものであつて、「女ひと」「続女ひと」の後の私の第三の随筆集である。

「犀星文学がその晩年に大きな開花をみた」「その直接の誘因に「入院生活」を挙げた沢田繁春論は、この三篇を「これまでの文学生活を多少なりとも振り返り、死の予感にとらわれながらもその後の方向を指し示しているような作品」だとしている。沢田論は三篇における共通した特徴に、「病気を契機として入院生活そのものもちろんのこと、病気に関連するいくつかの思い出、いくつかのエピソードについて感想を述べるといった随想風小説の体裁」をとり、「入院生活は、冒頭の執筆時期でも触れたように同時進行に近い形で取り扱われている」故に「作者の精神世界、バックグラウンドを垣間見せてくれていることにより、読者の関心を引く作品である」ことを挙げている。

また、星野晃一論も、「最晩年の目覚ましい活躍は、昭和二十九年から始まったとみることができ。その活躍を生んだ要因の一つは、昭和二十九年一月二十二日から二月二十三日にかけての胃潰瘍による約一か月の入院生活、およびその前後のそれにかかわる経験であると思う」と、その晩年の〈復活〉の一因として、この入院体験の重要性を指摘している。この星野論では、「黄と灰色の間答」、「文章病院」、「蝶紋白」に加えて、「くさ鏡」〔文芸〕昭和二九・一一）、「芸術家の生涯」〔群像〕昭和三一・三）、「行列の先にある人」〔キング〕昭和三二・五）、「われはうたへどもやぶれかぶれ」〔新潮〕昭和三七・二）と続く作品群を「（やぶれかぶれ）の覚悟・精神の中に創り上げられた」、「杏つ子」〔かげろふの日記遺文〕「蜜のあはれ」等第五期のきらびやかな文学の陰に、きわめて特徴的なひとつの流れとして存在している」ものとして、「芸術家の生涯」合評⁸の中村真一郎の発言を引用し

つつこれらの作品群を「長い「遺書」として論じている。

また、三浦仁論はこの昭和二十九年の入院中に書かれた「黄と灰色の間答」と退院後に書かれた「蝶紋白」を「共に入院中の出来事や心境を綴った短篇」と捉えた上で「蝶紋白」について、「最後の「一緒に死んであげませうか」と若い文学者に言ったというその妻の言葉をめぐる犀星の感想には、文学者の死と生についての自身の想いも込められている」と論じ、笠森勇論は「蝶紋白」を「黄と灰色の間答」「文章病院」に続く、「入院三部作」として「ガンかと疑われるような仕儀になって、自らの身体をいたわらざるをえなくなり、そこでそのことから直接に自分の作家業に思いをいたすところがあるが、まぎれもなく生活直結型である」と論じている。これらのように、先行研究において、「蝶紋白」は、晩年の入院体験、罹病体験を主題とした一連の作品の一つと捉えられており、作家の生活との強固な結びつきから論じられてきた。沢田論や三浦論、笠森論は犀星の「日記」から窺える入院中の執筆状況に言及しており、また、前出の星野論と同様の論点を含む星野晃一「われはうたへどもやぶれかぶれ」のバックグラウンド¹⁰も、昭和二十九年一月から同年三月にかけての「日記」から、「黄と灰色の間答」および「文章病院」の行間を埋める生の声を聞くことができる」としている。しかし、「日記」と「蝶紋白」の特徴的な差異は、これまで論点とされてこなかった。本稿では、まず昭和二十九年の室生犀星の入院中の執筆状況を、「日記」から確認していきたい。

入院中、二月二日には「共同通信に小品原稿を手交、／かうして入院してゐても、やはり書いてゐるデブシイ生活は、死ぬまで

つづくのだらう」との言及があり、四日には「小説公園」小説、書けるかどうか分らないが、結局書かなければ病院の費用が払えないことになるはずれば、無理にも書かなければならないのであらう」、九日には、「黄と灰色の間答」と題した入院記がやや見当がついた、医者 of の来ない間に盗人のやうに書いた小説、一四日には「病室にこもつてゐても、雪とか雨とかはたいくつである。けふも原稿をかいてゐるが、ここで原稿をかかないでゐたら、たいくつなことであらう、「黄と灰色の間答」と「円舞曲ガン」二篇で病院生活をつくしたつもりである」と二篇の執筆について書かれて、退院後の三月四日には次のように書かれている。

「円舞曲ガン」をあらため、「文章病院」とした。その方が素直であたりがよいからである。

入院中、「黄と灰色の間答」三十八枚、「文章病院」四十八枚、「蟲姫日記」二十八枚、雑文二稿八枚を書いたが、三十日間で百二十四枚書いたことになる、一日四枚医者の眼をぬすんでした仕事である。これだけの原稿料はそつくり病院に支払つたやうなものである。うつかり病氣もしてゐられない、糧道はねた翌日から止まつてしまふからである。

すでに先行研究での指摘がある通り、昭和二九年一月に胃痛を患い、その月の二二日から二月三日まで日比谷胃腸病院に入院していた犀星は、必要に迫られて「黄と灰色の間答」と「文章病院」を含む数作を執筆し、「入院してゐても、やはり書いてゐるゾプシイ生活」、「医者 of の眼をぬすんでした仕事」をしてゐたこと

が「日記」から分かる。

そして、このような作家の状況は、次のように、入院中に執筆された二篇に書き入れられている。「黄と灰色の間答」には、

そして彼は胃ぶくろにはちつとも関係のない顔付で、ちつとも胃潰瘍でも何でもない気持の取り直し方で例の鞆の中から原稿用紙を引きずり出し、毛布を四つ折にして机の高さをつくり上げると、そこに果物の木箱を置いて書く約束のあるものを書くことにした。

とあり、「文章病院」には、

病室は彼がはひると同時に仕事場になり、彼はベッドの上で原稿の取引執筆をやつてゐた。己むをえないことである。文学者といふものは病んで倒れると、倒れた翌日から糧道を絶たれてしまふ。

とあるように、この二篇では、たしかに「医者 of の眼をぬすんでした仕事」であつた入院中の執筆が「彼」の行為として書かれてゐるのである。

一方、四月一二日に「文藝」古山高麗雄来訪、仕事依頼、同月二二日に「仕事」、「文芸」の方は「蝶紋白」といふ題には「決定」と「日記」にあり、退院から二か月後に執筆を始められたことがわかる「蝶紋白」は、この点で決定的に異なつてゐる。

「蝶紋白」の冒頭は以下のように書きはじめられてゐる。

彼は彼の文章と一しよに病院に入ったといつてよい、永年のあひだに彼の文章はすさんでがたになり、潰瘍の出血やガン腫のおできだらけであつて、少しの休養のいとまもなく書いては人手に渡して、乏しい金にかへてゐた。文章もはつらつたる生きものであるから、心臓を酷使することが出来ないごとく、たまにはつかはずに休ませたかつた。だから彼はベッドの中にあて卵を搾くやうに、この文章といふものをひそかに搾いてゐた。

「黄と灰色の間答」と「文章病院」では、「日記」の中の作家と同様に、入院中も、病室内で医者に隠れながら書き続けずにはいられない作家の姿が書かれていたが、「蝶紋白」では、「文章」を「つかはずに休ませたかつた」と、「彼」が「文章」と共に入院するという虚構が提示されているのである。

『随筆女ひと』に始まる〈復活〉という事象の直前、「蝶紋白」には「文章」を「休ませ」ることが書かれ、もう一つの〈復活〉をその先に見据える物語が示されていた。

三 「文章」の入院

福永武彦¹⁴は、室生犀星の表現の特徴について「一般に犀星は悪文だと言われる」、「例えば人はそこに、主格と目的格が混同し、突飛な形容詞が出現し、一人称がいつのまにか三人称に化け、口では言えないような会話があり、従属句が奇妙に発展し、――要するに論理性がないと言う」ことに触れて、「そこには、この作

者なりの論理が厳然としてあり、それは彼の書く文章をも強烈に支配している」と捉えた上で、「部分的に悪文と見られたものが、全体の不条理の世界を暗示するための、絶対的な条件である」と指摘している。ここで福永は、「犀星の文章は、小間切れにして見本として出されれば生彩を失うので、常にその全体が問題なのである」としつつ、「この全体を愛する者にとつては、部分部分の奇矯な表現、曲り角やでこぼこ道の多いこの文章は飽きることのない魅力を感じているように思われる」と、室生犀星の小説における部分と全体の関係を述べているが、「文章」を実体化し、「潰瘍の出血やガン腫のおできだらけ」な状態からの回復をめぐる語り出される「蝶紋白」の検討は、その細部の表現の追跡から始められるべきであろう。

では、「蝶紋白」において「文章」の入院とは、どのように表現されているのか。冒頭部分、第一段落の全文を検討していく。

「蝶紋白」では、先に引用した「彼は彼の文章と一しよに病院に入ったといつてよい、」という書き出しからも明らかのように、「彼」の「文章」が繰り返し実体化されている。

冒頭の一文では、「彼」を主語として現在終止形の「といつてよい、」と現在終止形で断定する語りが、読点を挟んで、「永年のあひだに彼の文章はすさんでがたになり、潰瘍の出血やガン腫のおできだらけであつて」と「彼」の「文章」を主語に据えて擬人化する語りに移る。その上で、「少しの休養のいとまもなく書いては人手に渡して、乏しい金にかへてゐた」と、再び主語を振じ曲げながら「彼」の状況を説明する。続く、「文章もはつらつたる生きものであるから、心臓を酷使することが出来ないごと

く、たまにはつかはずに休ませたかつた」というセンテンスは、「彼」の心情を代弁する語りである。次の「だから彼はベッドの中に卵を搾くやうに、この文章といふものをひそかに搾いてゐた」というセンテンスでは、先の「彼」の視座による語りを受けた上で改めて「彼」を外から眺めなおし、「文章」を具体化している。「彼」の入院と並行する、「文章」の入院という「蝶紋白」において最も印象的な表現は、このような、視座の移ろいのなかで描出されているのである。

また、「蝶紋白」の語りの基調をなすのは三人称代名詞「彼」と〈タ〉文末の表現の使用であるが、「蝶紋白」の語りには、〈タ〉文末と、その他の文末表現の使い分けが見てとれる。特に、〈デアル〉〈デアッタ〉文末の表現が頻出する箇所について考えていきたい。

小説の文末表現と語りの主体性の関係を分析した研究に橋本陽介「日本語の語りの位置はどこにあるのか」¹⁵⁾がある。橋本論は、「一人称、現在」を表さない「比較的ニュートラルな形式」である〈タ〉文末と三人称代名詞の使用によって「三人称客観描写」を完成していった日本の近現代文学史において、「だ」も「である」も「一人称、現在」に属する判断を表す語であり、「もとをただせば『浮雲』第一篇に見られたような主体的に語る語り手の残存である」と指摘した上で、次のように指摘している。

このような日本語の物語の実態そのものを考察すれば、過去形で語られる物語内での出来事が「客観的な叙述」であり、現在形で語られる部分が「主体的な語り」というように、「本

来的に別次元」とする考え方そのものが間違っていることがもはや明らかである。「タ形」を用いて客観的に叙述されているように見えるのは、その主体性を隠しているにすぎない。

このような前提に立つ橋本論が、「だ」「である」など、判断を表す文末詞とタ形について、「一人称現在を示唆するような文末詞に比べ、『だ』であった」「あなた」の方が客観的でニュートラルな感じになる」とした上で、「物語で使用されている場合、タ形による叙述はその文を物語世界内部のことだけについてのみ語っていることになり、判断する主体性が弱まるのである」と論じ、〈デアル〉文末、〈デアッタ〉文末、〈タ〉文末において見え隠れする主体性の程度について、その強弱を分析していることは示唆的である。

「蝶紋白」に〈デアル〉文末の表現が最初に見られるのは、第一段落の「或る医者とはほとんど患者とは反対の側に顔をそむけてゐても、お腹に置いた手のさはりだけで、少しのくるひのない見きはめができるのである」というセンテンスが最初である。その出現部分を、既に引用した冒頭部分の直後から確認しよう。

元来は医者は医者という音楽家であつて、その指頭のかんかくは腹部にさはるときには、内臓の中にある異常であるための些かの濁音と傷痕をも、取りにがすこと無く捉へてゐた。

医者といふ音楽家はただ単に皮膚のうへに、指がそぞろ歩きをするくらゐの触りであつても、とどろき互る心臓の交響樂をはじめとして、胆嚢の泥沼や、胃腸の懸崖坦道の悪沢をも、

確りとおさへることが出来てゐた。指頭と大脳への電撃的な診方は、もはや音楽家と同じ速度と、或る優美なもつれ合ひを現はすことによつて、患者がどこでつまづいた健康を訴へるかを診判して行つた。或る医者はおとんど患者とは反対の側に顔をそむけてゐても、お腹に置いた手のさはりだけで、少しのくるひのない見きはめができるのである。最近はやつてゐるガイガー計数管が感応する放射能の効きめは、ずつと五百年近い以前から医師の指頭がその役割をはたしてゐたことでも判る。(注、傍線は論者による。以下同じ。)

ここでは、「その指頭のかんかくは腹部にさはるときには、内臓の中にある異常であるための些かの濁音と傷痕をも、取りにがすこと無く捉へてゐた」と、物語現在で「彼」を触診する特定の「医者」の様子が語られているようでありながら、「元来」という語により「医者」一般として総括されている。物語現在に対して再現的な語りから、非物語現在の要約的な語りへとゆるやかに移行するなかで、「医者」の「指のそぞろ歩き」の「触り」は、その触診の捉える感覚が「とどろき互る心臓の交響楽」や「胆嚢の泥沼や、胃腸の懸崖坦道の悪況」という比喻によつて示される。そして、「デアル」文末の一文では、物語現在から距離を取り、「或る医者」と「患者」との関係が語られている。続く「判る」という現在終止形文末のセンチンスでは「最近」という語が使われることで、語りの現在が頭わになつてゐる。ここでは、物語現在から離れていく語りの動きによつて、「彼」と「文章」の症状のイメージが形成されるのである。このように「蝶紋白」においても、

〈夕〉文末と〈デアル〉文末の使い分けは、「本来的に別次元」な位相のスイッチングではなく、主体的な語りが見え隠れする無段階的な加減だと考えられる。

また、「医者」、あるいは比喻としての「音楽家」の説明は、プロフェッショナルな人物が有する感覚について、聴覚的表現と触覚的表現を用いて提示するものとなつてゐた。それは、「文章」を实体化する語りの性質を、「文章」を「酷使」してきた「彼」の特異性に結びつけて考える補助線となるのではないか。

第一段落の末尾、物語の現在に戻ると、

医者は平常あらゆる生活の中で嘗て誰からもたしなめられたことのない彼に、いつもベッドの上に起き上がり、タバコをふかし濃い玉露をすすつてゐるのを見附けて、煙草を禁じ茶を禁じて去つた。彼はふしぎさうにその厳格さが加へられたことを、いつも患者の立場にあることをわすれて不満げに感じた。

と、「彼」は「患者の立場」になりきれず、外での立場を病院に持ち込んでゐる人物であることが示される。入院生活といつても、「彼」にとっては「平常」の「あらゆる生活」と地続きであり、「いつも患者の立場にあることをわすれて」しまふのである。そんな「彼」の現在に、「患者の立場」を突きつけ、「平常」の彼の立場と並べることとその差異を問題にしているのは語り手である。彼の「平常」の立場とは何か。「文章」を「酷使」してきたことが冒頭から示され、結末部では詩集を出していることも語り

れる「彼」は職業文筆家だと考えていいだろう。「医者」や「音楽家」と同様に、「彼」の視座は「文章」を感覚で捉えることのできる特異な専門性を語り仮託している。「蝶紋白」において「彼」の「文章」の実体的な入院が語られるとき、主体的に語りがつねに見え隠れする反面、その主体的な語り自体が、「文章」のプロフェッショナルである「彼」に寄り添った視座を引きずり、それに依存している度合いも大きいのである。このような、語りと「彼」と「彼」の「文章」の関係が、「患者」としての「彼」を浮かび上がらせ、その上に「患者」としての「文章」を見出し、編成していく。

四 〈文学〉の言葉と〈日常〉の言葉

では、語りによって「彼」の入院の上に編成される「文章」の入院は、どのように展開していくのだろうか。

「蝶紋白」の第二段落、「彼」の前から医者が去ると、「彼」と「かんごふ」の栗山さんとの会話が間接話法で語られていく。注目すべきは、ここで繰り返されるとりとめのない会話には、それぞれがどう発話したのかが示されていることである。栗山さんの「真顔になつていった」という発話に対して、「彼」は「ふてぶしく大胆にいった」とあり、さらに栗山さんが「怒つていった」のを受けて、「彼」は「失敗つたえらい事になつたと思つたが、さらにながらぬけと言つた」というように、二人の会話は、それぞれがどう発話したのか、イントネーションが付与されて語られている。そして、ここでも〈デアル〉〈デアッタ〉文末の表

現が繰り返されていく。

ステームのそばで毛糸をほろほろと乾かしてゐるのを、眼ざはりだと彼は禁めさせたのである。それをお弁茶羅をいつて乾かしなさいといふのである。それからけふは女のお客様があるからお寿司を取るやうにし、暖かいからお清拭をしてくれませんか、此処にゐるとお清拭くらゐる気持の爽っぱりすることはない、と、平常お清拭いやがつてゐる彼はわざとご機嫌取りにお清拭をするといふのであつた。お清拭とはからだを熱いタオルで拭きとることをいふのである。

「彼」の発話は、「デアル」「デアッタ」文末の表現によって語りの判断が加えられ、「お弁茶羅」「ご機嫌取り」といったものとして捉えなおされている。このような「お弁茶羅」「ご機嫌取り」の言葉は、「彼」の酷使してきた職業的な「文章」とは異なつた、〈文学〉的ではない〈日常〉の言葉であることが強調されている。

また、「蝶紋白」は、「彼は彼の文章と一しよに病院に入つたといつてよい」という書き出しからしてそうであつたように、句点で区切られる文末表現だけではなく、現在終止形に読点が付けられた表現が見られる。例えば、病院勤務の「かんごふ」による「彼」への治療の場面では、

病院附のかんごふは髪に純白のかんむりのやうなものを冠り、白い靴をはいて毎朝やつて来る、修道院か何かの風俗の

型をとつたものらしく、うしろで白いつばさのやうに結び目を蝶のやうに展げてゐた。この清潔なすがたほど、患者をきりつとさせるものはない、彼女はぶどう糖にビタミンBとルノチンのふとい注射を、永い間かかつて静脈に針をつつ通してゐた。ベッドの上からは朝の化粧したばかりのくちびるが、べにをふくんで生気を帯び、きんぎよの泳ぐやうに見上げられる、彼は文章を抱いてゐる母親のやうにおとなしく、永い注射が終るとからだの位置をかへた。

と、語りがゆるやかに移ろい、その主体性が見え隠れしていることがわかる。「彼」に焦点化した語りと外観的な語りとの境界の曖昧さが、「蝶」や「きんぎよ」に喩えられる「かんごふ」を騙し絵のように象つてく。

このような語りのなかで、「彼は文章を抱いてゐる母親のやうにおとなしく、永い注射が終るとからだの位置をかへた」という実体的な「文章」が見出され、その治療へと向かう。

「非常にゆつくりした言葉つきで、それも性質のゆるやかさの現はれとして、幾つかの文字を空気のあひだにならべた」と実体的に捉えられる「あかるいところに立たないで、……」という言葉、それに続く、「片手間の返事らしく先刻とおなじぐあひで、平仮名の一字づつに空間を置いて」とされる「おかんちようとしてあげて……」という言葉、これらの「かんごふ」の発話は、「妙なところに文字のうつくしさのあることを知つたのである」と「文字のうつくしさ」に変換され、「彼」に発見されたものとして語られるのである。「彼」は、この「かんごふ」の言葉を、「彼

の文章に刺戟をかんじ、ひとり言をして言葉のあとを少時越うた」と、反芻していく。「彼」によって「あかるい」ところに立たないで、……これは彼の文章といふ赤ん坊のためには、気のきいた子守うたのやうなものである。そして患者である彼自身へは、おかんちようして、といふ第二聯の詩が口ずさまれた、「あかるいところに立たないで、……」と繰り返されるたびに、言葉が読点や空白によって少しずつ変化していく。「彼」は「かんごふ」の言葉を反芻しながらも、そのままに繰り返していない。そのことは、「蝶紋白」に書かれ、私たちの読む、「かんごふ」の言葉が、その発話そのものでもなければ、「彼」が見た文字そのものでもないという当然の事実を浮き彫りにする。「お辯茶羅」「ご機嫌取り」と語られた「彼」の栗山さんとの間接話法の会話の後、栗山さんの機嫌がなおると、

彼もいい塩梅だとあるだけの見えすいたお世辞をいつて、ベッドの上で例の彼自身の文章をいたはつた。これは誰にいつても通じないことであり同じ文学者でもこれを読むと巫山戯てやがると却つて笑ふかも知れない。

と語られる。「日常」の言葉が書き込まれつつも、小説としての評価を下す〈文学〉的な枠組みが意識されているのである。

また、「かんごふ」の言葉を「彼」が反芻する場面も、〈デアル〉〈デアツタ〉文末と、現在終止形に読点が付けられた表現で語られている。それは、「彼はけふのそれが平常我が詩とか何とかを頭の中にさがしまはつてゐても、決して見付からなかつたもの

であつて、實際の人と人のあひだにうたはれてゐながら、それつきり失くなつてしまふ記憶すべき一行であつたのである。「氣を附けてゐると人間はたいせつな言葉を、どれだけ多くのものを毎日失うてゐるか分らない、そしてそれは後で捜しやうもないのである」という、「日常」で発せられる、一回性の言葉である。「蝶紋白」は、そのような言葉を小説に引き入れることで、「一筒のぶどう糖は彼と彼の赤ん坊とが半分づつ分けあふやうであり、そしてその効きめは同じでなければならぬのである」という、「彼」と「文章」のための「くすり」としての効果を期待する。

「文章」を「休ませ」ることを書くという矛盾に始まつた「文章」の入院では、「詩とか何とかを頭の中にさがしまはつてゐても、決して見付からなかつたもの」、「實際の人と人のあひだにうたはれてゐながら、それつきり失くなつてしまふ記憶すべき一行」という〈日常〉の言葉を〈文学〉の言葉の中に書き入れるという矛盾の先に、回復が想定されるのである。

「蝶紋白」は四つの一行空きを挟んで五つに分かれている。第一のまとまりでは、「かんごふ」の言葉を聞いてから「三週間は過んで」、その言葉を反芻する「彼」が病室を出て病院の一階へと階段を下りられるようになったところまでが語られ、第二から第四のまとまりでは、病院内を徘徊する入院中の「彼」が見聞きしたエピソードが断片的かつ羅列的に語られている。このなかで、特に文体の特徴が見てとれるのは、第三のまとまりの便秘に苦しむ「彼」が栗山さんに治療を受ける場面である。ここでは、それまで「備前の壺」の前に「彼」と「小使」が交わした会話で見られなかつた直接話法による会話文の連続によって、物語現在

が進めらる。

流腸での治療が失敗に終わると、栗山さんは「ほじる」という治療法を提案する。これに対し、「彼」は、「ほじるとは？」「何をするんです？」「ほじる？ ほじるとはどんな訳なんです。」と繰り返し、未知の治療の前に、これまでの会話のように主導権を握ることはできない。そして、その治療が終ると、次のように語られる。

彼はその時すつかり不淨物が排出されたことを知り、あをざめた栗山さんの顔を更めてちらと見た、そこには仕事をしつて終へた職業人として彼女と、それとは別の人間としての勢ひに満ちた彼女が、ふたとほりの優越感をもつて彼の視界をとほり過ぎた。汚穢と混乱とを整理した彼女は今は平和な普通の状態で、跡始末をするためにまめまめしく立ち働いて手をつた。先刻の事どもはかんごふといふ職業を超越したものであつた。なかなかあれだけの事をやつて退けることは出来ないものである。

「蝶紋白」の冒頭では、プロフェッショナルの特殊な触覚が雄弁に語られ、それが「文章」を「酷使」してきた「彼」の特異性と接続されることで、「文章」を実体化する表現が用いられていた。しかし、ここでの栗山さんは、「職業人」と「人間の勢ひ」の二面性を同時に見出され、「職業を超越したもの」として語られる。それは、患者の症状が「彼女の視界から神経にはいつて行きき」、「おなじ方向にしだいに、日を趁うて連れて行かれる」よう

に「患者」との同化に向かうものである。

では、直接話法による会話文の最中に行なわれた行為が、「彼」への焦点化から事後的に捉えなおされるとき、「彼」の所属する職業的な（文学）の専門領域と（日常）の領域の隔たりを無化し、その境界線をとび越えた表現となり得たてているのだろうか。

だが、「彼」にとつて、「患者」と同化してしまふ体験談は、「いつも栗山さんのいふふしぎな言葉を胸にかんじた」ものとして想起される。つまり、「これは一体何といふ職業なのだ、縁もゆかりもない人間の苦痛を取り除くために、医者にも出来ないしごとを敢行するために自分の疲労体力まで賭けるといふことは、一体どういふことだらう」と、栗山さんを「職業」から捉えようとする語りにとつては、彼女の在り方は理解不能なものだ。「蝶紋白」の語りは、あくまで〈文学〉と〈日常〉の二元論に依拠しながら、〈文学〉の立場から〈日常〉の言葉を書き入れようと試みていくのである。

五 「どんな小説のなかにも発見できない」言葉

第五のまとまりでは、〈夕〉文末の表現以上に、〈夕〉文末以外の表現が多く見られる。ここでは物語現在と舞台であった病院は後景化し、次のように始まっている。

赤ん坊の皮ふといふものは鋭敏な感覚を持つてゐるものだらうが、赤ん坊は夜が明けるとすぐに目をさます、老人といふものも、夜が明けると間もなく起きてしまふ、赤ん坊は生

きるために夜明けといふ輪郭の外側に足を踏み出して暴れる、老人は一日といふ時間を少しでも余計に生きたいために、もう庭に出たり、畠に出たりしてゐる。この二つの世界で目先のない奴と、たつぷり先のある奴とが、うしろ向きになつて蟹のやうに横這ひを続けてゐる、彼は実は老いたる蟹の正であつた。

冒頭で「すさんでがたがたにな」るほど「酷使」した「文章」を「ひそかに搾いてゐた」と語られた「彼」は、「一日といふ時間を少しでも余計に生きたいために、もう庭に出たり、畠に出たりしてゐる」「老人」であることが示され、外側へと放たれる。「赤ん坊」が「鋭敏な感覚」の「皮ふ」を持つて「夜明けといふ輪郭の外側に足を踏み出して暴れる」ように、「彼」は「蟹のやうに横這ひを続けて」、慣れ親しんだ文学の領域の外側へと出ていく。ここで「老人」と「赤ん坊」とが並置されることは、第一のまとまりにおける、「彼」と「文章」との関係を転覆させている。この第五のまとまりでは、それまでのように「文章」が実体化されるのではなく、入院している物語現在の「彼」の実体性が抜きとられていくことで、「彼」が「文章」の擬人化であるようにさえ感じられるのである。

「文章」を「休ませ」ることを書くという矛盾に始まり、さらに日常の言葉を文学の言葉に書き入れるという矛盾によつて回復が期待されていた「文章」の入院は、「彼」が立脚する〈文学〉の領域の言葉と、その「輪郭の外側」である〈日常〉の領域の言葉との二項を振りあわせていく。ここで注目すべきは、〈日常〉

へ向かうその姿が、幾重にも比喩を重ねた、〈文学〉的な言葉によって捉えられていることであろう。

「蝶紋白」の結末部、連想の果てに、「突然、彼の頭に或る一行の会話がうかんだ」と、「そんなに苦しかったら、ね、一緒に死んであげませうか、かういつて彼女は十年も苦しんでゐる若い有名な文学者であり良人であるかれに、顔をよせていつたさうである。ばかなことをいひなさんな、僕の小説をあつて誰が見ておくれと再度もいつたさうである」という会話が引かれた上で、次のように語られている。

人間はうそでかたまつたやうな動物であるが、ひとたび、その嘘がほぐれてしまふと、全く死んでくれる人さへあるのである。そのやうな人をおめおめ死なせるひともいないだらうが、この言葉の一行はどんな小説のなかにも発見できないものであつて、彼はうそでもいひからこんな言葉に出会すために、生きてゐたのではなかつたか、生きてゐるからこの言葉にふるひ付きたくなる、麗しさを見せてくれるのではなからうか。

ここで発せられる問いかけの中で、答えは宙吊りにされながら、言葉の価値と生きる意味とは決して重なりあわないが、それぞれをどこまでも追いかけあう回転運動によって、作家の生活が夢想的に作り上げられるのである。「どんな小説のなかにも発見できない」言葉について書いたからといって、作者と読者とがその言葉を享受できるわけではない。だが、そのような言葉を「うそで

もいい」とするとき、〈文学〉と〈日常〉、そのどちらでもないところに「うそ」が成り立ち得るなら、両者の差異は転覆されるであろう。回復点は、〈文学〉的な場とも〈日常〉の場とも離れた、書かれ／読まれる言葉が働く場へとずらされて、そこでの〈復活〉が期待されている。

「蝶紋白」発表後の室生犀星の〈履歴〉を見るかぎり、その期待は正しかったことになる。『隨筆女ひと』以降、それまでの〈文学〉の場とは異なつた読者層によつて、犀星は再評価され、〈復活〉していく。そして、その現実の成功は、「蝶紋白」によつて示されていたプロセスを消去し、「私の履歴書」で懐古した「物の怪に憑かれたやうに」書き続けるといふ作家の像を確立することによつて、支えられていくことになる。しかし、その〈復活〉が、「蝶紋白」の検討から確認してきたように、あくまで〈文学〉的な権威性を持つた立場から、書かないことを書くという虚構として出発していたことは無視できない。晩年の室生犀星の文学営為の検討は、このことを確認することから始められなければならないだらう。

注

- (1) 室生犀星の単行本のジャンルは『室生犀星書目集成』（昭和六一・一一、明治書院）に拠つた。
- (2) 奥野健男「犀星評の変遷（九）」『室生犀星全集』月報第一号、新潮社、昭和四二・一八
- (3) 森晴雄「夕映えの男」論——「生きてゐる証拠」——『室生犀星研究』平成一三・五
- (4) 「日記 昭和三十年」『室生犀星全集』別巻二、新潮社、昭

和四三・一)

- (5) 谷田昌平「晩年の室生犀星」(『回想 戦後の文学』筑摩書房、昭和六三・四)
- (6) 沢田繁春「入院もの三部作「黄と灰色の間答」「文章病院」「蝶紋白」について——晩年開花への跳躍台——」(『室生犀星研究』平成六・一〇)
- (7) 星野晃一「われはうたへどやぶれかぶれ」論への諸言」(『解釈』平成八・一一)
- (8) 中村真一郎・福永武彦・加藤周一「創作合評」(『群像』昭和三一・四)
- (9) 三浦仁「昭和後期(戦後期)」(『室生犀星——詩業と鑑賞——』おうふう、平成一七・四)
- (10) 笠森勇「蝶紋白」(『犀星の小説100編』龍書房、平成二五・四)
- (11) 星野晃一「われはうたへどもやぶれかぶれ」のバッググラウンド」(『室生犀星 創作メモに見るその晩年』踏青社、平成九・九)
- (12) 「日記 昭和二十九年」(『室生犀星全集』別巻二、前出)
- (13) 『室生犀星全集』第九卷(新潮社、昭和四二・八)では、「擁」という字に訂正している。
- (14) 福永武彦「解説」(『日本文学全集24 室生犀星集』新潮社、昭和三五・一〇)
- (15) 橋本陽介「日本語の語りの位置はどこにあるのか」(『物語における時間と語法の比較詩学——日本語と中国語からのナラトロジー』水声社、平成二七・八)

※引用に際して、原則として漢字の表記は新字体に改め、ルビは適宜省略した。なお、本稿における室生犀星の文章は注記のない限り初刊単行本から引用した。ただし、「私の履歴書」の引用は初

出「日本経済新聞」に拠っている。

※本稿は室生犀星学会秋季大会(二〇一四・一一・一五、於タワールホール船堀)における口頭発表に基づいている。

(よねやま・ひろき 大学院後期課程在學生)